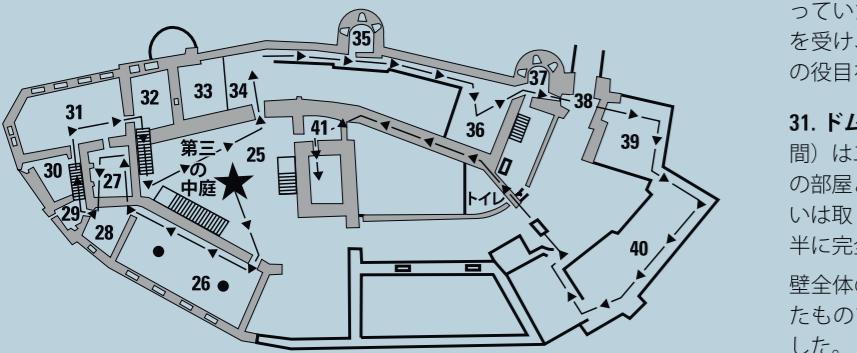


張出窓は1250年頃のもの、ゴシック様式の丸天井は13世紀末のものです。壁と天井の装飾は、14世紀初頭当時から残るオリジナルです。1914年から1916年にかけ、特に傷みが激しかった部分はある程度まとめてはがして補強した上で、修復されました。その後、水の浸透によって装飾画の状態が悪化したため、1985年から1995年にかけ、部分的に修復がなされ、それ以前に修復された部分（1914～1916年）はそのほとんどが取り除かれました。

この絵は、一見すると断片的ですが、注文者であるサヴォワ伯アメデ5世の意向を受け、実はキリストを中心にした、一貫したテーマを持って描かれています。礼拝堂の建築的な区分けにそれぞれ割り当てる形で、丸天井には聖ヨハネを除く旧約聖書の人物、壁には新約聖書の人物が描かれています。

階段を下りて、中庭を横切ります。



25. 第三の中庭(F) | 正面広場と呼ばれる、この第三の中庭は、サヴォワ一家の住まいに囲まれていました。

26. オーラ・マグナ(U1) | 中世には、サヴォワ家が、接見、レセプション、パーティーなどに使用しました。また、臣下を呼んで、裁判を行ったのも、この部屋でした。13世紀に「オーラ・マグナ」または「下のオーラ・マグナ」（下の大広間）と呼ばれたこの場所は、その後ベルン人支配時代には、粉ひき器と圧搾機が設置され、製粉部屋となりました。1839年からは、「正義の間」と呼ばれています。

黒大理石の柱、湖に面した窓は13世紀、天井と暖炉は15世紀のものです。

この大広間と隣の二つの部屋は、現在、貸しホールとして、ディナーショーやカクテルパーティー、またはコンサートなどの催しに利用されています。そのため、ご見学いただけない場合もございます。

27. アランジュの部屋(X) | この部屋は、13世紀には寝室として、ベルン人支配の時代には、ブドウの圧搾所、火薬庫として使われました。14世紀には、大砲の倉庫となりました。

部屋の名は、12世紀にこの城に住んでいたと思われる、有力な一族の名に由来しています。この部屋が位置する塔の部分は、城の防御を固めるために、おそらくその時代に建築されました。

28. 拷問の部屋(U2) | 寝室に隣接するこの部屋は、サヴォワ家時代には、小客間あるいは衣裳部屋として使われていました。17世紀には、拷問室

として使用されました。

壁画と天井画は、1898年に復元されたものです。壁には、それ以前の時代に、この部屋を上と下の二階層に分けた跡が残っています。

柱やその頭部、アーチ部分に、13世紀後半に描かれた装飾は、大変珍しく、貴重なものです。

29. トイレ(V) | 13世紀の建築です。

30. カメラ・ノヴァ(W) | 14世紀末、ここは上の部屋と同様、サヴォワ一族が使用し、「カメラ・ノヴァ・ジュクスタ・マグナム・ペリウム」、すなわち、「大ストープの横の新しい間」と呼ばれていました。

最近になって、ここは「委員会の間」とも名付けられましたが、これは、シャン城修復協会の運営委員が、1930年代に、ここで委員会を行っていたためです。1887年に設立されたこの協会は、ヴォー州の支援を受け、シャン城の修復と運営に携わり、2002年、シャン城財団にその役目を引き継ぎました。

31. ドムス・クレリコラム(G) | 13世紀、ドムス・クレリコラム（書記の間）は二階層になっており、シャン城とシャブレー地区を管理するための部屋として使われました。17世紀には、この部分の建物は、崩壊あるいは取り壊しにより、無くなりました。書記の間の下の階は、20世紀前半に完全に復元されたものです。

壁全体の絵は、13世紀の装飾の跡をもとに、1947～1948年に復元されました。天井は、拷問の部屋に残っていた絵をモデルに描かれました。

32. 模型展示室(Y) | サヴォワ家の礼拝堂の下に位置するこの部屋は、13世紀以前のものです。現在ここに展示されている、20世紀に制作された模型は、考古学者アルベール・ネフが手がけた38年にわたる工事の成果に基づき、城の建設過程を示したもので

33. 本館(H) | 12世紀末から13世紀初頭にかけて改築された本館は、倉庫以外に、城の防御という役割も持っていました。14世紀には、牢獄としても使われました。この場所は15世紀に崩れ落ち、20世紀はじめに建てから復元されました。

模型展示室の階段を上り、第三の中庭を抜けて、左にある第四の中庭へ向かいます。

34. 第四の中庭(H) | 「クーチンの中庭」（二つの防御壁を結ぶ中庭）と呼ばれるこの中庭は、城を防衛し、旧街道を監視するために造られました。厚い防御壁、矢を射るための穴や銃眼といった狭い開口部、そして防衛のために建設された覆道（ふくどう：木製の足場）や石落とし、城前面の斜堤が見られます。

35. 防御塔(Z1) | 半円形の3つの塔は、1230年頃に建築され、何度も改築されました。また、より効果的に城を防衛できるよう、しばしば改修も行われました。この防御塔は、3つある塔のうち、2つ目に当たります。

よろいのコレクションが展示されています。

36. ロジア・パーラメンティ(L) | 13世紀から15世紀にかけて、ここは、「ロジア・マグナ・パーラメンティ」（屋根付きの大きな部屋）というその名通り、屋根のついたバルコニーの形をした、大きな応接室でした。サヴォワ公や城主たちが、ここで謁見と裁判を行っていました。その後、この部屋は15世紀末に台所となり、16世紀になって一部が取り壊され、下の第一の中庭を監視する司令室に改築されました。17世紀末には、鍛冶場（かじば）となり、1836年以降は、大砲運搬車の格納庫として使用されました。

37. 防御塔(C) | 城の入り口を見張る駐屯兵のために、16世紀と17世紀に改築されました。この3つ目の塔は、先ほどの防御塔と同じ造りになっています。

監視回廊と天守閣へは、番号に従ってまっすぐ進みます。

38. 入り口(A) | 15世紀に建てられたこの建物は、城の入口の上に位置しています。

監視塔に進みます。

39. 監視塔(B) | 入り口近くに位置する塔は、時計塔とも呼ばれています。おそらく、城の入り口と橋を防衛するために建てられました。

この階には、監視兵の住居があったと思われます。現在は、城に住む管理人のアパートとなっています。

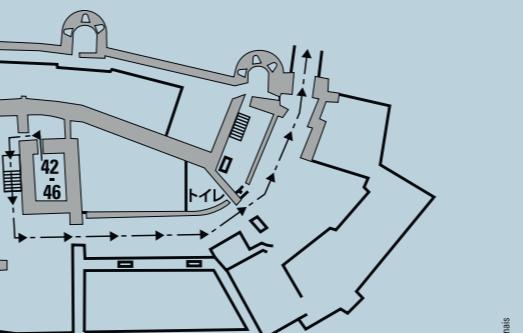
40. 監視回廊(N,N1,P,E) | ここからは、一方に城の中庭、反対側に、ヴィルヌーヴの街やアルプス前衛山脈を背後にした、湖の素晴らしい眺めを堪能することができます。監視回廊の曲がり角には、船の「へさき」のように、望楼がつけられています。

城の事務室となっている建物を通り越すと、第一、第二の中庭を見下ろすことができます。その先の監視回廊は、サヴォワ時代当時から残るもので

城の宝物館に入ります。

41. 宝物館(K) | 13世紀末に建築されたこの建物には、貴重品、土地に関する登記証書、古文書、とりわけサヴォワ家の記録文書が収められていました。1815年に、改造され、階段構造になりました。

順路に従い、天守閣へ進みます。



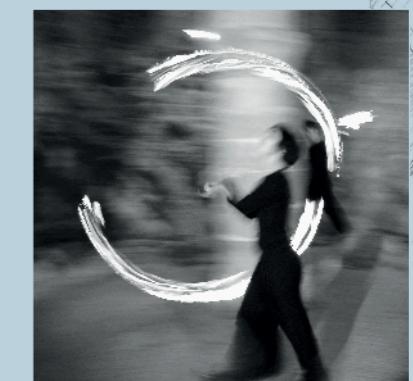
42-46. 天守閣(I/J) | シヨン城が建てられている岩盤の、ほぼ中央付近に位置するこの天守閣は、おそらく11世紀に建築されました。

避難塔、そして権力のシンボルを兼ねた天守閣はまた、見張り塔や、一時的な住居、倉庫としても使われました。後世には、牢獄や火薬庫となりました。天守閣の入り口は、安全のため高い所に位置していて、はしごや跳ね橋を使ってしか入ることが出来ませんでした。年代は不明ですが、天守閣は一度高く改築された後、14世紀初頭になって再び高く改築され、現在の高さ（約25メートル）になりました。

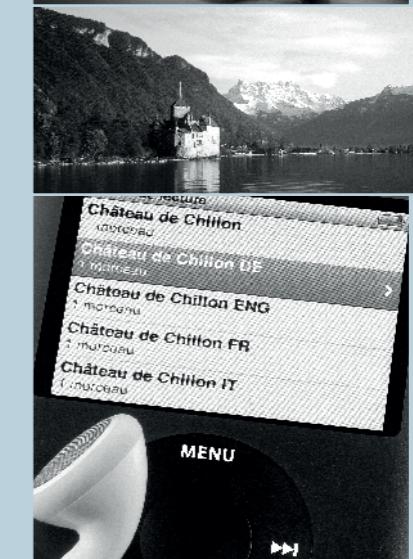
かつて、住まいとして使うことができたのは2階部分だけでしたが、20世紀にこの天守閣が修復された時、階段が取り付けられ、最上階まで上がれるようになりました。最上階からは、城とその一帯の360度のパノラマが一望できます。

43番と44番には、武器のコレクション（クロスボウ、剣、火縄銃、槍など）が展示されています。

天守閣と宝物館の階段の下から、第二、第一の順に二つの中庭を下っていくと、城の出口に出ます。



CHILLON  
SITE CULTUREL SUISSE



ご見学の皆様へ

シャン城へようこそ。スタッフ一同皆様のお越しを心より歓迎いたします。

このパンフレットには、当城の説明が見学順路に沿って記載されています。説明の番号は、見学順路に対応し、城内の案内図にも同じ番号が表示されています。6歳から10歳までの子様を対象としたパンフレット（フランス語・英語・ドイツ語）をご希望の方は、入場券売り場、2番の売店、または4番のオーディオガイド貸出窓口へどうぞ。

iPodのオーディオガイド（フランス語・英語・ドイツ語・スペイン語・イタリア語・ロシア語・中国語・日本語）も、別途有料でご利用いただけます。このオーディオガイドでは、城の建築や歴史について説明しております。

さらに、見学順路に沿って設置された説明パネル（フランス語・英語・ドイツ語）には、建築物とその歴史、そこに住んだ人々の暮らしが紹介されています。

CHILLON  
SITE CULTUREL SUISSE

FONDATION DU CHÂTEAU DE CHILLON  
21, avenue de Chillon  
CH - 1820 Veytaux-Montreux  
電話: +41 21 966 89 10  
ファックス: +41 21 966 89 12  
info@chillon.ch  
www.chillon.ch

With collections from the  
MCBAH Musée cantonal d'archéologie et d'histoire  
Lausanne

@chateuchillon  
#ChateauddeChillon  
#Chillon

シヨン城は、歴史的建造物です。監視カメラが設置されています。皆様に快適にご見学いただくため、また、この文化遺産を後世に残すためにも、以下の行為はかたくお断りいたします。

- ・城内の喫煙
- ・指定された場所以外での飲食
- ・ペットを連れての入場（盲導犬を除く）
- ・壁にいたずら書きしたり、名前を書いたりすること
- ・壁画、タペストリー、家具、武器のコレクションに触れること（軽く手を触れただけで損傷することがあります）

更に、他の方々もこの歴史的建造物を静かに見学できるよう、会話は低い声で、また、携帯電話のご使用はお控え下さるよう、お願いいたします。

中世の建造物であるため、今日一般的な安全基準を全て満たすことはできません。頭上の低い出入口、急な階段など、けがをされる危険のある箇所には、十分ご注意ください。ご自身と、同伴されたご見学者の安全を確保して下さるよう、お願いいたします。

それでは、シヨン城とその歴史の探索に参りましょう。どうぞゆっくりご見学ください。

**シヨン城の歴史** | 現在のシヨン城は、何世紀にもわたる建造と改築を経てきました。

城が建築された岩盤は、自然の地形によって防衛された場所であるとともに、ヨーロッパの北と南の通行を監視する、戦略上の拠点でもありました。

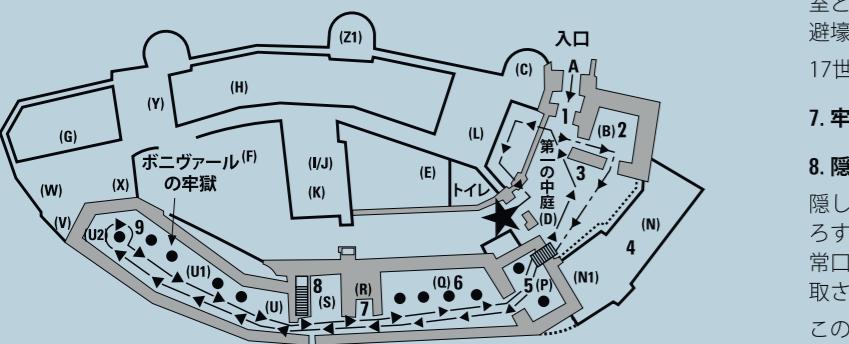
シヨン城の歴史は、大きく3つの時代に分けることができます。

- (1) サヴォワ家領時代（12世紀-1536年）
- (2) ベルン人所有時代（1536年-1798年）
- (3) ヴォー州所有時代（1798年-現在）

19世紀末から行われた城の発掘調査、中でも、ヴォー州の考古学者、アルベール・ネフ（1862年-1936年）の調査により、シヨン城が建つ岩盤には、青銅器時代から人が住んでいたことが明らかとなりました。

城についての最古の記述は、1150年にさかのぼります。そこからは、サヴォワ家が、この要塞とレマン湖沿いの通路を既に支配下においていたことがうかがえます。

1536年にベルン地方のスイス人がヴォー地方を征服し、シヨン城を占領します。その後、260年以上にもわたり、城は要塞、武器庫、そして牢獄として使用されました。1798年のヴォー州革命後、ベルン人は城を去り、ヴォー州設立の1803年に、この城はヴォー州の所有となりました。



城の修復工事は19世紀末に開始され、現在も引き続き行われています。各部屋の名称の後に表示されたアルファベット文字は、その部屋が、シヨン城のどの部分に位置するかを示しています。天守閣と5つの中庭を囲むように作られた、幾つもの部分的建築物それぞれに、このアルファベット文字が対応しており、城のどの部分を指すか分かるようになっています。湖側に面する建物は、住居として使用されていましたが、陸側は攻撃に備えた造りになっています。

**1. 入場門(A)** | 自然の地形を利用した堀にかかる橋は、18世紀のものです。20世紀初頭に行われた発掘調査で、ここからストーブのタイルや、革、食器類やガラスの破片など、シヨン城の歴史をしのばせるものが多く見つかりました。

**2. 売店(B)** | 現在見られるこの塔は、15世紀のものです。当時は城への入口と橋を守るものでした。

壁や暖炉の上には、当時から城に残っている装飾をもとに、1898~1899年に描かれた装飾が見られます。この絵はテンペラ画で、シヨン城にある他の装飾画も、そのほとんどがこの画法で描かれています。テンペラ画は、顔料を水と糊剤に混ぜて描く技法で、中世に用いられました。

今日、皆様をお迎えするこの場所には、城の売店とオーディオガイドの貸出カウンターがあります。

**3. 第一の中庭(D)** | 第一の中庭は、馬小屋などに囲まれており、元来はこれほどの大さはありませんでした。現在の大きさに造りかえられたのは、1584年の地震の後です。

**4. 城の模型(N)** | 当時は、ここに、16世紀後半に造られた馬小屋と家畜小屋がありました。

現在、このスペースも受付として使用され、城の模型の展示、オーディオガイドの貸出しカウンターがあります。

次に、この部屋を出て、階段を下って5番の部屋へとお進みください。その際、頭上と足元に十分ご注意ください。

**5. 地下貯蔵室(P)** | おそらく11世紀に造られたものですが、その後、拡張と改造がなされました。現在見られる形は13世紀のもので、ゴシック様式の丸天井から、当時の建築様式をうかがうことができます。この場所は、ワインの貯蔵室や倉庫として使われました。

**6. 倉庫(O)** | 城の土台となっている岩盤が突き出して見えます。この地下室と次に続く部屋は、13世紀のものです。当時、この場所は貯蔵室や待避壕として使われていました。

17世紀と18世紀には、ベルン小艦隊の兵器庫として使われました。

**7. 牢獄(R)** | かつて、ここに囚人を監禁しました。

**8. 隠し戸(S)** | この地下室は、元々貯蔵庫として使われていました。

隠し戸（城の外壁にはめ込まれた小さな扉）は、城の住人が貯蔵品を降ろすための出口として、また、いざという時に湖の方へ逃げるための非常口として使われていました。実際、1536年にベルン人によって城が奪取された時には、この隠し戸が非常口となりました。

この場所は、おそらく16世紀から処刑所となりました。

**9. ボニヴァールの牢獄(U・U1・U2)** | 元々は食糧庫、兵器庫として使われていましたが、1290年頃に牢獄となりました。

この牢獄は、イギリスの詩人、ロード・バイロンが1816年にうたった詩、「The Prisoner of Chillon」（シヨンの囚人）の舞台として知られています。この詩には、この地下室に幽閉されたフランソワ・ボニヴァール（1493-1570年）がうたわれています。

見学順路を引き返します。そのまま階段を上って第二の中庭（12番）へ進むか、または地下礼拝堂（10番）へ下るか、お選びください。

**10. 地下礼拝堂(D)** | 第一の中庭の下に位置するこの地下礼拝堂は、19世紀末の発掘調査で発見されました。ここは、おそらく11世紀に建てられた礼拝堂の一部で、当時崖と城の間（現在の道路と鉄道の下）にあったシヨンの村の人々のために、ここで礼拝が行われていたと思われます。この地下礼拝堂は、13世紀、城の上階にもう一つの礼拝堂が建設されたため、使われなくなりました。

現在では、祭壇と階段のみが当時の面影を残しています。

**11. 控えの間(S)** | この控えの間は、隣のベルン様式の寝室へと続いています。おそらく使用人や召使いが使っていました。ベルン様式の天井は、1931年に復元されたものです。

**12. ベルン様式の寝室(S)** | この部屋は中世に寝室として利用され、ベルン人支配時代にもおそらく同じ用途で使われていました。白の背景に植物や果実、動物が描かれたベルン様式の装飾は、17世紀初頭のものです。

**13. ピエール二世の間(U)** | この部屋は、サヴォワ時代には客間として使用されました。

白の背景にグリザイユ画法が施された、壁の下の部分は、1587年のものです。上方には、13世紀に描かれた装飾の跡が見えます。仕切りの壁は1921年に復元されました。

**14. 紋章の間(U1)** | ここは、中世時代には謁見の間として使われており、オーラ・マグナ（26番の大広間）の真上にあることから、「上のオーラ・マグナ」と呼ばれていました。暖炉と格天井は15世紀のものです。

壁に見える多色の帶状装飾には、1536年から1733年まで城主としてこの城に住んだ、ベルンの代官たちの紋章が施されています。

**15. カメラ・ドミニ(X)** | カメラ・ドミニ（領主の寝室）は、サヴォワ伯爵、後の公爵の寝室でした。この部屋は、13世紀、サヴォワ家のピエール二世の時代に建築され、14世紀に大きく改造されました。壁の装飾は、その改造当時のオリジナルです。

中世には、城の管理を任せ、城主と呼ばれたサヴォワ家の役人が、この中庭に面する建物に住んでいました。

11世紀に城壁の中心に建築された天守閣は、今日のシヨン城に残る、最も古い建造物です。

**16. 城主の食堂(Q)** | この部屋は20世紀初頭に修復され、中世的な雰囲気になっています。13世紀末のモデルをもとに、城の他のほとんどの壁と同様、テンペラ画（前述2番の項を参照）が施されました。カシの木の柱は13世紀、格天井と暖炉は15世紀から残っているオリジナルです。

城の中でも、かつて住居として利用されたエリアには、13世紀の大きな窓がつけられています。この部屋もその一つです。サヴォワ家時代には、この部屋は城主の食堂として使用され、ベルン人時代には、厨房と居間の二つに区切られていました。

食事を出て、上階に進みます。

**17. ロウラ・ノヴァ(A)** | 20世紀に修復されたこの部屋は、かつては城主の宴会場でした。

アーチ型の天井は、1925~1926年に、考古学者アルベール・ネフにより復元されました。

壁の装飾は、カメラ・ドミニ（19番）に今でも保存されている装飾をもとに、20世紀初頭に復元されたものです。奥の壁に見られる、サヴォア家の盾形紋章は、15世紀のものです。

この部屋を出て、同じ階にある次の部屋へ進みます。

ここから先、サヴォア家の私邸として使っていた部屋が続きます。これらの部屋は、サヴォワ家の人々が城に来た時にだけ開かれ、調度品が置かれて使用されました。

**18. 控えの間(S)** | この控えの間は、隣のベルン様式の寝室へと続いています。おそらく使用人や召使いが使っていました。ベルン様式の天井は、1931年に復元されたものです。

**19. ベルン様式の寝室(S)** | この部屋は中世に寝室として利用され、ベルン人支配時代にもおそらく同じ用途で使われていました。白の背景に植物や果実、動物が描かれたベルン様式の装飾は、17世紀初頭のものです。

**20. ピエール二世の間(U)** | この部屋は、サヴォワ時代には客間として使用されました。

白の背景にグリザイユ画法が施された、壁の下の部分は、1587年のものです。上方には、13世紀に描かれた装飾の跡が見えます。仕切りの壁は1921年に復元されました。

**21. トイレ(V)** | 13世紀に造られたこの場所は、トイレとゴミ捨て場という二つの機能を兼ねていました。穴が二つあることから、トイレが共同で使われていたことがうかがわれます。

階段を下りる際は、足元にご注意ください。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種のシャスラーから造られており、ラヴォー地区の8つの原産地呼称統制ワイン産地のうちの一つ、ヴヴェ・モントルーに属するものです。シヨン城のブドウ畑は、ラヴォー地区が、ヴォー州のシャブレ地区に接する境界線のちょうど手前に位置しています。ラヴォー地区の一部は、2007年6月28日に、ユネスコ世界遺産に認定されました。

シヨン城のブドウ畑で収穫されたブドウ（シャスラー）で作ったワインは、売店で販売され、その収益金は城の保存と修復作業のために役立てられています。

**22. 板張りの部屋(W)** | この部屋は、おそらく14世紀にサヴォワ家の女性たちの住まいとして使われていました。

天井は15世紀のもので、1931年に近くのヴィルヌーヴ村からシヨン城に移されてきました。同じくヴィルヌーヴ風の壁の板張りも、1925年に復元されました。

この部屋からは、湖、モントルーの街、そしてシヨン城のブドウ畑を一望できます。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種のシャスラーから造られており、ラヴォー地区の8つの原産地呼称統制ワイン産地のうちの一つ、ヴヴェ・モントルーに属するものです。シヨン城のブドウ畑は、ラヴォー地区が、ヴォー州のシャブレ地区に接する境界線のちょうど手前に位置しています。ラヴォー地区の一部は、2007年6月28日に、ユネスコ世界遺産に認定されました。

シヨン城のブドウ畑で収穫されたブドウ（シャスラー）で作ったワインは、売店で販売され、その収益金は城の保存と修復作業のために役立てられています。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種のシャスラーから造られており、ラヴォー地区の8つの原産地呼称統制ワイン産地のうちの一つ、ヴヴェ・モントローに属するものです。シヨン城のブドウ畑は、ラヴォー地区が、ヴォー州のシャブレ地区に接する境界線のちょうど手前に位置しています。ラヴォー地区の一部は、2007年6月28日に、ユネスコ世界遺産に認定されました。

シヨン城のブドウ畑で収穫されたブドウ（シャスラー）で作ったワインは、売店で販売され、その収益金は城の保存と修復作業のために役立てられています。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種のシャスラーから造られており、ラヴォー地区の8つの原産地呼称統制ワイン産地のうちの一つ、ヴヴェ・モントローに属するものです。シヨン城のブドウ畑は、ラヴォー地区が、ヴォー州のシャブレ地区に接する境界線のちょうど手前に位置しています。ラヴォー地区の一部は、2007年6月28日に、ユネスコ世界遺産に認定されました。

シヨン城のブドウ畑で収穫されたブドウ（シャスラー）で作ったワインは、売店で販売され、その収益金は城の保存と修復作業のために役立てられています。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種のシャスラーから造られており、ラヴォー地区の8つの原産地呼称統制ワイン産地のうちの一つ、ヴヴェ・モントローに属するものです。シヨン城のブドウ畑は、ラヴォー地区が、ヴォー州のシャブレ地区に接する境界線のちょうど手前に位置しています。ラヴォー地区の一部は、2007年6月28日に、ユネスコ世界遺産に認定されました。

シヨン城のブドウ畑で収穫されたブドウ（シャスラー）で作ったワインは、売店で販売され、その収益金は城の保存と修復作業のために役立てられています。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種のシャスラーから造られており、ラヴォー地区の8つの原産地呼称統制ワイン産地のうちの一つ、ヴヴェ・モントローに属するものです。シヨン城のブドウ畑は、ラヴォー地区が、ヴォー州のシャブレ地区に接する境界線のちょうど手前に位置しています。ラヴォー地区の一部は、2007年6月28日に、ユネスコ世界遺産に認定されました。

シヨン城のブドウ畑で収穫されたブドウ（シャスラー）で作ったワインは、売店で販売され、その収益金は城の保存と修復作業のために役立てられています。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種のシャスラーから造られており、ラヴォー地区の8つの原産地呼称統制ワイン産地のうちの一つ、ヴヴェ・モントローに属するものです。シヨン城のブドウ畑は、ラヴォー地区が、ヴォー州のシャブレ地区に接する境界線のちょうど手前に位置しています。ラヴォー地区の一部は、2007年6月28日に、ユネスコ世界遺産に認定されました。

シヨン城のブドウ畑で収穫されたブドウ（シャスラー）で作ったワインは、売店で販売され、その収益金は城の保存と修復作業のために役立てられています。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種のシャスラーから造られており、ラヴォー地区の8つの原産地呼称統制ワイン産地のうちの一つ、ヴヴェ・モントローに属するものです。シヨン城のブドウ畑は、ラヴォー地区が、ヴォー州のシャブレ地区に接する境界線のちょうど手前に位置しています。ラヴォー地区の一部は、2007年6月28日に、ユネスコ世界遺産に認定されました。

シヨン城のブドウ畑で収穫されたブドウ（シャスラー）で作ったワインは、売店で販売され、その収益金は城の保存と修復作業のために役立てられています。

現在、シヨン城では12500m<sup>2</sup>のブドウ畑を所有しています。シヨン城のワイン、「クロ・ド・シヨン」は、白ブドウ品種